The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死に関する情報を含む映像が青年の情動変化に及ぼす影響 : 映像に対する関心の高さ、死別体験の影響
Author(s)	尾﨑, 勝彦; 荒井, 龍淳
Citation	生老病死の行動科学. 2004, 9, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11965
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

死に関する情報を含む映像が青年の情動変化に及ぼす影響
ー映像に対する関心の高さ、死別体験の影響ー

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）　尾　﨑　勝　彦
（大阪大学人間科学部人間科学科）　荒　井　龍　淳

Abstract

The simplest way of death education is to show participants an image that contains death stimulus. However it is either very difficult or impossible to find the effect of death education. On the other hand, some studies say that the image does not have direct effects on the change of participants' attitude but their mood. So in this experimental context the first thing to do is to detect the participants' mood changes after showing the image. The aim of this study is 1) finding what kinds of mood changes are induced by death stimulus and 2) whether the mood change depends on the participants' interests in the image and their bereavement experience or neither of them. A documentary program about a dying patient with cancer was shown to 53 youths. All sub scales of POMS except "Depression" and "Fatigue" have been significantly changed. However this mood change depends on neither their interests nor bereavement experience. Further, no correlation was found between them. Therefore, this kind of program that describes so called good death has an effect on the mood change of youth that might be previous stage of attitude change.

key words：experiment, mood change, interest in death stimulus, death education

Ⅰ　緒言

大量殺戮の時代であった20世紀を終え、誰もが平和な世紀の幕開けを望んでいた矢先、ニューヨークでの無差別テロが発生した。爾来、ほんの数年の間に、世界各地でテロ・戦争が繰り返され、毎日のようにかけがえのない命が奪われ、また、今後も奪われ続けるであろうことが報道されている。しかも、それは遠い彼岸のことではなく、常に我々日本人が巻き込まれる危険性も十分にあり、また、実際に巻き込まれており、ここにきて、我々は命のかけがえのなさ、尊さを日常的に考えさせられざるを得ない状況に置かれているのである。

一方、医療技術・生殖技術の飛躍的な進展により、脳死や臓器移植、クローン技術や胚性幹細胞、遺伝子組み替えなどの技術が実用化、または実用化研究が展開されている。ここで、「生命とは何か」という、ある種抽象的・哲学的な問いかけが今日ほど現実的・実用的な意味合いを持って議論されたことはいまだかつてなかったであろう。

命の尊さを思うとき、また、「生命とは何か」という問いかけが行なわれるとき、その対極の概念である「死」に対する問いかけも必然的に行なわれる。柏木（1996）が指摘するように、死が否定される時代にあっては、死は忌むべきもの、避けて通るものとして位置付けられ、これまでほとんど議論がされてこなかった。長期間にわたって死が否定される時代が続いてきたことと命の尊さを考えさせられざるを得ない状況によって、「生命とは何か」という問いかけが現実的・実用的な意味合いを帯びてきた今日において、死を議論していくことは必要不可欠である。

このような時代背景もあってか、近年「死」を正面から積極的に捉えてテーマとするデス・

エデュケーションへの関心が高まってきている。デス・エデュケーションで、まず問われるのはその効果である。効果としては、死の不安や恐怖の軽減をとりあげられる事が多く、デス・エデュケーション前後におけるそれらの変化を測定した研究が多く報告されている。しかし、これらの示す内容は必ずしも一貫しておらず、死の不安や恐怖がデス・エデュケーションによって軽減したとする報告（e.g., Berman, 1998-99; Durlak, 1978; Johansson & Lally, 1990; Miles, 1980）がある一方で、逆に増加したという報告（Bell, 1975; Combs, 1981; Wittmaier, 1979）もみられる。この結果の不一致は、デス・エデュケーションの効果的な遂行の困難性を表していると同時に、そのプログラム内容の多様性、教育を施す側、および受ける側のパーソナリティや生活履歴の多様性などが、結果に影響を与えていると思われる。また、赤澤（2004）は、わが国においてデス・エデュケーションを実施している、または実行したことのある教諭にインタビューを行い、彼らの孤軍奮闘ぶりやその実施の困難性をデス・エデュケーション実施上の問題点とともに指摘している。死は本来恐怖・不安の対象であり、死の不安や恐怖があるのは自然なことである（デーケン，1986）という立場からすれば、デス・エデュケーションは、死を特化して考えるのではなく、誰にでも必ず訪れる死を通して自分の人生を見直し、生命の大切さ、自己の存在の唯一性などを考えるきっかけを与える（e.g.; Hayslip & Cynthia, 1993-94 平山, 1985; 木村, 1990; 柏木, 2001）ということがその目的となるだろう。デス・エデュケーションのプログラムは、大別して教示的プログラムと経験的プログラムがあるが、最も単純な形態は、教示的プログラムで死に関する情報を含む映像などの視聴覚教材を提示することである。そして、提示前後での視聴者の変化がデスエデュケーションの当座の効果となる。

映像がその聴取者に及ぼす影響に関する研究は、特に暴力映像の及ぼす影響を中心に数多くなされている。古典的には、暴力行為の正当性が高く、それに対して報酬が与えられるような場合に視聴者の攻撃行動が促進される（Bandura, Ross, & Ross, 1963; Berkowits & Alioto, 1973; Green & Stoner, 1973; Hartmann, 1969; Huston-Stein, Fox, Greer, Watkins, & Whitaker, 1981）というものである。しかし、現実的には暴力映像が提示されたからといってそれが直接に視聴者の攻撃行動を喚起するのではなく、さまざまな社会的抑制が働く。湯川・吉田（1998a, p90）は、「こうした中で近年、暴力映像は直接的に攻撃行動促進に影響を与えるのではなく、認知および情動（感情・生理）といった変数が媒介するといった議論がなされている」と述べており、Bushman & Green（1990）、Berkowits（1984）、Jo & Berkowits（1994）、吉田・湯川（1996）がその具体的な研究報告を行なっている。

ここまでをまとめれば、命の尊さを日常的に考えざるを得ない時代、死を議論するべき時代にあって、デス・エデョケーションに関心が持たれていること、しかし、その目的を死の不安や恐怖の軽減とした場合、必ずしも一貫した結果が得られず目的自体の適切性にも疑問があること、従って死を通して自分の人生を考え直すきっかけを与えることが適切な目標設定であろうことである。それを最も単純な形で遂行するならば、死に関する情報を映像などで提示することであるが、数々の暴力映像提示の研究結果の類推から、映像提示そのものが直接的に行動変容や促進には結びつかず、まず、情動や認知に影響をおよぼすだろう、ということである。しかし、赤澤（2004）が指摘しているように、デス・エデョケーション実践にあたっての豊富な教材が必要ではあるが、ここで、単純に死に関する情報を含む映像を提示するだけで、その目的に適うのかどうか、映像提示後、視聴者はどのような影響を受けるのか、に関する研究（Oranchak & Smith, 1988-89）は極めて少ない。しかもこの Oranchak らの研究（1988-89）

は死に関する情報を含む映像として、二輪車・自動車の交通事故を描写したものである。これは不安を喚起する目的で用いられており、デス・エデュケーションとは文脈の異なるものである。

筆者は前々報において、死に関する情報を含む映像を、若年層（学生)、および50歳以上の中高年層の対象者に提示したところ、若年層において情動変化が見られたものの、中高年層においては、まったくその変化が認められなかったことを報告した（尾﨑，2001)。これは、当該映像が、死別などの喪失経験のほとんどない若年層の関心を惹きつけたのに対し、既に自身が喪失体験を経てきていることの多い中高年層の対象者は、若年層ほどには関心を示さなかったことによるものであろうと推測した。しかし、自分の関心の高い映像を提示された場合、情動が変化するのは当然のことであり、これが、映像に含まれる死に関する情報そのものによって引き起こされたと結論することはできない。また、前々報における対象者の提示映像に対する関心の有無は、自由記述の感想から読み取ったもので、実際に対象者がどの程度の関心を示したかということは未知である。したがって前報では、死に関する情報を含む映像が、どの程度関心を持たれるのか、およびその関心の度合いと情動変化はどう関連するのか、を見出すことを目的として実験を行った。しかしながら、多くの対象者が高い関心を示したこと、対象者人数が少なかったこと、および年齢の統制が実験の都合上とれなかったことなどから、明確な結論を導き出す事はできなかった（尾﨑，2003)。

そこで、本研究で、対象者人数を増やし、かつ、その年齢を統制し、さらに、情動変化に影響を及ぼすと考えられる死別体験についての影響も併せて検討したので報告する。

Ⅱ　実験手続き

1．対象者

介護福祉科の専門学校生62名を本研究の対象者とした。そのうち53名（女性34名、男性19名、M=20.4歳、SD=2.2歳）から有効回答が得られた（有効回答率85.5%)

2．実験日時・場所および状況

2003年12月17日に筆者の一人が担当する専門学校の心理学の授業の一環として行なわれた。実験場所は当該専門学校の視聴覚教室である。実験は対象者の所属するクラスごとに行われ、両クラスとも同時に映像を視聴した人数は31人であった。映像は視聴覚室のスクリーンに投影され、その大きさは108インチであった。

3．実験装置・実験課題

＜映像＞死に関する情報を含む映像として前報同様末期がんで死にいたる患者の海外制作ドキュメンタリー番組を用いた。これは、末期がん患者がその病名と予後を宣告されてから死に至るまでの家庭生活を描いたドキュメンタリーである。初老の男性患者は、死を完全に受容していて、妻や訪問ホスピスのスタッフ、友人達との時間を一日一日大切にして生活している姿が淡々と描かれている。プログラムの最後に夫を看取った妻は、「死によって彼が苦悩から解放されたと思う」と語る。自己の死を受容し、良好な家族関係、友人関係の中で死を迎え、また、周囲の人々も死に行くものに対して心限りのケアを与えている、いわゆるgood deathのひとつのあり方が表現されている。オリジナル映像は60分近くの長さのものであるが、20分に編集

した。
＜質問紙＞映像提示前後に以下の構成からなる質問紙調査を行なった。
1）情動尺度 POMS（Profile Of Mood States）日本版（横山・荒記，2000）：65 項目からなり、「不安－緊張」、「抑うつ－落込み」、「怒り－敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の程度を測定する。これら 6 つの得点を加算したものを「総合」値として検討する。オリジナル版の回答は、「まったくなかった」（0 点）－「非常に多くあった」（4 点）の 5 件法であるが、まったくなかった、非常に多くあった、というような過去形の表現から、過去の事実について回答するという印象を与える恐れがあるために、「まったくなかったような気がする」のように「－ような気がする」を回答文に付与した。さらに現在の気持ちを回答させるために、「人の気分はちょっとしたことで変化するといわれています。」、「あなたのいま、現在の気分状態をお尋ねするものです。」という説明文を回答欄の前に与えた。
2）フェイスシート：年齢、性別、および氏名を記入させた。氏名はプライバシー保護のため偽名使用可能なこと、および偽名使用の場合は映像提示前後の 2 回の質問紙に同じ偽名を用いることが実験者によって口頭で教示された。
3）関心の程度：対象者が日常鑑賞する映像メディアで、最も関心を持っているもののジャンルを尋ねた。その最も関心の高いジャンルに対する関心の度合いを 10 として、提示映像の相対的な関心の度合いを 1 から 10 までの数値で回答させた。数値が大きいほど提示した映像に対する関心が高い。なお、この設問は映像提示後の質問紙にのみ掲載した。
4）死別体験：対象者の死別体験の有無を以下の 6 段階で尋ねた。数値が小さいほど死別や死を直接的に体験していることになる。また、1．および 2．については、差し障りのない範囲で具体的に死別者を回答させた。
①家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人の死を看取ったことがある。
②家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人との死別体験がある。
③実習先の施設等であなたと関係のあった人（担当した入居者、仲良くなった入居者など）の臨終現場に立ち会った、または居合わせたことがある。
④実習先の施設等で入居者（3．で示した以外）の臨終現場に立ち会った、または居合わせたことがある。
⑤事故や災害の現場などで死者（遺体）を生で目撃したことがある。
⑥上記 1～5 のような体験はまったくない。
5）自由記述感想：映像を見た後の感想・意見などを求めた。なお、この感想部分は、授業のレポート扱いとしたため、全員に記入することを求めたが、内容がレポート得点に反映されないことを強調して対象者に伝えた。この設問も同様に映像提示後の質問紙のみに掲載された。

4．実験の手続き
実験者が対象者に同意書を配布し、実験手順の説明を行い、実験に対する同意を口頭で求めた。なお、同意書には、実験手順の説明と共に、実験参加・不参加の自由、同意後の実験遂行放棄の自由に関する事項が含まれ、当該事項についてはさらに口頭による説明がなされた。具体的には、授業の一環として行ったので、同意することができず、退席した場合でも出席扱いとし、成績に影響しないことを伝えた。同意書記入後、実験者が同意書を回収すると同時に 1 回目の質問紙を配布し、記入させた。対象者の記入終了を見計らって実験者が誤記入のないこ

とを確認することを口頭で求めた後、質問紙が回収された。次に、実験者は映像提示の開始を宣言し、映像を提示した。映像プログラム終了後、2回目の質問紙を配布した。1回目と同様実験者が誤記入のないことを確認することを口頭で求めた後、質問紙が回収された。その後、実験者は対象者に対して、実験の全過程終了を宣言し、実験協力に対する感謝の言葉を述べ、実験の意図を説明した。また、クラスごとに2回行われた実験のうち、最初のクラスの実験終了後、次のクラスの対象者に実験内容を伝えないように口頭で注意を与えた。

5．分析

分散分析、および相関分析をSPSS9.0J for Windows（SPSS. Inc., 1999）を用いて行った。

Ⅲ　結果

1．映像提示前後のPOMS値の変化

表1に映像提示前後のPOMS値、およびt値を示す。「疲労」と「抑うつ－落込」をのぞく全ての項目において有意に低下した。

表1．映像提示前後の各POMS値の変化 (n=53)

項目	*M/SD*	提示前	提示後	t値
緊張-不安	*M*	16.17	13.94	2.75***
	SD	7.58	7.04	
抑うつ-落込	*M*	23.19	23.34	-0.12
	SD	11.88	11.50	
怒り-敵意	*M*	15.17	8.19	7.57***
	SD	9.86	7.31	
活気	*M*	13.21	9.11	4.45***
	SD	5.81	6.55	
疲労	*M*	13.57	11.98	1.98
	SD	7.48	6.39	
混乱	*M*	13.08	10.47	5.16***
	SD	5.73	5.00	
総合	*M*	94.38	77.04	5.39***
	SD	36.74	30.64	

*** $p<.001$

2．映像に対する関心の高さ、死別体験とPOMS値の変化量の関係

映像に対する関心の高さは、*M*=7.4、*SD*=2.1であった。表2には、死別体験の分布表を示す。若年層にもかかわらず、重要な他者との看取りのある死別体験のある者が15%、看取りのない死別体験のある者が64%を占めた。死別した重要な他者はその多くが祖父母であったが、阪神大震災による友人なども含まれていた。また、実習先での担当介護者等との死別体験者は少数であった。

表3に、Table 1に示したPOMS値の変化量（提示後の値-提示前の値）と、関心の高さ、および死別度との相関分析結果を示す。何れの相関係数も低く、かつ、有意確率も高く、当デー

タにおいては、情動変化と関心の高さ、死別度は関連性がないことがわかった。さらに、関心の高さと死別体験の有無は因果関係が予測されるので、両者の相関分析を行ったところ、γ=.03、p=.83という結果が得られ、両者は独立であることが示された。従って、死別体験の有無と映像に対する関心には関連性がないことが示された。

表2．死別体験の有無（死別度）分布表 (n=53)

死別度	定義	度数	割合(%)
1	家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人の死を看取ったことがある	8	15.1
2	家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人との死別体験がある	34	64.2
3	実習先の施設等であなたと関係のあった人(担当した入居者、仲良くなった入居者など)の臨終現場に立ち会った、または居合わせたことがある	1	1.9
4	実習先の施設等で入居者(3で示した以外)の臨終現場に立ち会った、または居合わせたことがある	2	3.8
5	事故や災害の現場などで死者(遺体)を生で目撃したことがある	1	1.9
6	上記1～5のような体験はまったくない	7	13.2

表3．POMS値の変化量と関心・死別の相関 (n=53)

		緊張-不安	抑うつ-落込	怒り-敵意	活気	疲労	混乱	総合
関心	相関係数	-.067	-.066	.179	.058	.075	.015	.046
	有意確率	.633	.639	.199	.667	.592	.917	.744
死別度	相関係数	.078	.064	-.010	-.031	.100	-.006	.057
	有意確率	.581	.648	.942	.826	.477	.963	.684

3．関心の高さ、死別度による対象者の群分け

3.2.項の結果から、情動変化は関心の高さ、死別度と無関係であることが示された。本項では、このことをより明確にするために対象者を高関心群－低関心群、および高死別度群－低死別度群の独立した群分けを行い、情動変化量の群間比較をt検定を用いて行った。各群に所属する対象者は、ほぼ人数が同一となるように、関心の高さを10と回答したもの9名を高関心群、同2～5と回答した者9名を低関心群とした。また、死別については、重要な他者の死を看取ったことがある者（死別度1）8名を高死別度群、一切の死と遭遇したことがない者（死別度6）7名と、事故等で全くの他人の死を目撃したことがある者（死別度5）1名の計8名を低死別度群とした。この低関心-高関心群間の比較、および低死別度-高死別度群間の比較を行ったが、高関心-低関心群間の「怒り－敵意」のみが5%で有意であった（t=2.55、p<.05）他は、

全て非有意であった。

Ⅳ　考察

1．関心の高さ、死別体験と情動変化量の関係

前項の結果より、本研究においては、情動の変化量と関心の高さ、および死別体験の関係は見出せなかった。このことについて検討する。

表2や、図示しないが関心の高さの分布から、本研究の対象者は大半が映像に高い関心を持ち、ほとんどの対象者は何らかの死別体験があった。このことから、高関心であるか、死別体験・看取り体験があるかのどちらかを満たしていることが、情動変化と関連付けられる可能性がある。そこで、低関心、かつ、低死別である対象者2名の情動の変化量を調べた。その結果、変化の少ない側では、ほとんどが1σ以内に分布しており、最大でも1.4σであった。このことから、低関心・低死別の対象者が必ずしも変化量が小さいわけではないことが分かった。このことから、青年層の情動変化は、関心の高さや死別体験に関連しないことが結論付けられる。ただし、低関心・死別体験なしという対象者が本実験では少ないために、今後検討していく必要はあるだろう。

唯一、高関心-低関心の比較において変化量の有意差がみられた「怒り-敵意」について考える。推定要因として、1）初期値の影響、2）当該サブスケールの鋭敏さ、3）当該実験のローカルな状況、などが考えられる。まず、1）初期値の影響であるが、「怒り-敵意」の提示前の値は、高-低関心群間で有意な差がなく（t=.23，p=.82)、初期値の大きさ、すなわち下がり代の大きさは関係しないことがわかった。次に2）当該サブスケールの鋭敏さについて検討する。Table1から、この「怒り－敵意」のｔ値が各サブスケールの中でもっとも大きく、変化しやすいものと考えられ、関心の高さもその変化の要因の一つである可能性はあるが、その因果関係は明確でない。また、3）の当該実験のローカルな状況については、この実験の特殊性は授業の一環として行われたものであるということである。学生にとって授業に出席しなければならないということは、多かれ少なかれ負担のかかることであり、その負担のかかる状況、すなわち、怒りを誘発しやすい状況にあって、自分にとって関心の高い映像を提示されると、怒りの気持ちは容易に減少するのものと思われる。

2．既報との比較

表4に今回の結果と併せて前々報（尾﨑，2001)、および前報（尾﨑，2003）における青年層対象者の結果を示す。各チャンスによって有意に低下するものが異なっているが、「怒り－敵意」、および「活気」はすべてのチャンスにおいて有意に低下しておりその中でも、本研究がもっとも高度に有意に低下している。これは、本研究の対象者の同時視聴人数がもっとも多いことが関連していると考えられる。前報では、17人と本研究の約半数の人数であり、また、前々報では、実験状況が異なり、同時視聴人数は2人、または3人である。しかし、ここで問題にされるのは単純に人数の多少ではなく、その中に、涙ぐむなどの感情表出を呈する対象者が含まれるか否かということである。人数が多いほど、感情表出対象者が出現する可能性が高く、実際に実験中すすり泣きなどが観察された。このような視聴者の態度は他者に影響を及ぼすと考えられる。提示映像のテーマは異なるが、暴力映像視聴時に同席している視聴者が、当該映像に肯定的な態度を示した場合に、当該映像視聴者の攻撃行動が促進されることを、

Hicks (1968)、Dunand, Berkowits, & Leyens (1984)、および湯川・吉田 (1998b) が報告している。

表4．POMS 値の変化－既報との比較

	報告	前々報	前報	本報告
対象者	$n_{全}$	22	17	53
	$n_{女性}$	12	14	34
	$n_{男性}$	10	3	14
	M	20.3	20.2	20.2
	SD	1.1	1	2.2
項　目	緊張-不安	1.42	0.50	2.75***
	抑うつ-落込	-0.89	0.29	-0.12
	怒り-敵意	4.05**	2.71*	7.57***
	活気	4.94**	3.13**	4.45***
	疲労	1.56	2.47*	1.98
	混乱	1.96	1.36	5.16***
	総合	4.28**	2.02+	5.39***

+p<.1, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

3．自由記述感想

表5に、Ⅳ 1. 項で示した関心の高さ、死別度で4分類した対象者の自由記述感想を示す。当然のことながら、死別度の高い対象者は、視聴した映像を自分のこととして受け取っている。「かなしい」、「さみしい」、「つらい」、といったネガティヴな感情を示す言葉は、4分類のどこにも見られるが、関心の高い対象者は、「その人らしさ、人生をまっとうできるように…」、「生きることは簡単ではない」、「自分の力で生きようとする姿を見て感動した」、など、それでも何か前向きにとらえた箇所があるように思われる。これに対し、関心の低い対象者は、「つらかった。正直見たくなかった」（低関心・高死別者）とか、「このようなものもあるのだと思い驚いた」（低関心・低死別者）と、あまり前向きにとらえたところが感じられない。後者の低関心・低死別者などは、どこか他人事のようにとらえている感がある。あるいは、引き起こされたネガティヴな感情のために提示された映像を遠ざけようとして、関心が低いという回答を誘導した可能性もある。そこで、これをデス・エデュケーションの教材ととらえた場合、当該映像を関心の高い人に提示することにより、少なくとも人生や死について関心を持ち、それらについて考えるという目的が達せられると考えられる。それに対して、関心の低い人に提示した場合は、ネガティヴな感情が優位になり、少なくともその場においては、望ましくない結果になる可能性があると考えられる。

一方前々報（尾﨑, 2001）における中高年対象者の感想にも、ネガティヴな感情を示す記述は見受けられた。しかし、それらのネガティヴな記述以上に、「気持ちよくさせられた」、「死ぬのが恐くなくなった」、「常に平常の生活が大切だ」、といったような青年層には見られない、力強い記述が多かった。これは年齢による差異であると考えられる。そして、年齢による差異とは、喪失体験の回数であろう。Whitty (2003) は、年齢が上がるにつれて、死別のような

喪失体験の回数が増加し、それに対するコーピングが形成されることを報告している。本研究の対象者は、死別体験があるといえども、おそらく初めてのことであろう。それに対して、中高年層は、祖父母をはじめ、親、友人等多くの死別体験を経ていることが予測される。

表5．関心・死別度の高さに基づくグループ間の感想比較

区　　分	感　　想
高関心・高死別度群の感想	私は、祖父の末期ガンのターミナルを、家族全員で在宅で見ました。このビデオと同じように、かなしみや、さびしさがとてもありました。私は、祖父が死んでから、正直、楽になったと思いました。人は生きている以上、死からはのがれられないと思います。しかし、その人らしい、人生をまっとうできるように、周りの家族や友人の力が、とても大切だと思います。
	自分の"死"をビデオカメラに残すという事がとても凄いと思いました。そして奥さんが亡くなった後に涙を流さなかった、亡くなった方が楽になったので良かったとの言葉にとても共感しました。自分自身の体験とかさなって見えて辛くもありました。生きるということは簡単ではナイと思いました。
高関心・低死別度群の感想	かなしかった。毎日を大切に過ごしていてよかった
	「末期のガンです」と医者から聞いた本人からするともう何も信じられなくなると思います。この方は末期のガンを宣告されてしまったのに自分の力で生きようとされている姿を見て感動しました。
	ビデオを見て、ハービーさんはとても強い人間だと思った。自分のとう病生活から、ターミナル、死去するところまでのテレビの取材に答え、明るく「生きよう」とする前向きな気持ちが伝わってきた気がする。とても感動した。
低関心・高死別度群の感想	自分の曾祖父をみとった時と同じような状況だったので、つらかった。正直見たくなかった。
低関心・低死別度群の感想	人の死を最後まで影像で見たのは初めてで、病気と闘って死んでいく人の気持ちやその人の家族や周囲の人の気持ちなどが見れ、このようなものもあるのだと思い驚いた。少し泣きそうになった。

V　結言

青年層を対象として、死に関する情報を含む映像を提示した際の情動変化を調べた。POMSで測定されるいくつかの情動が有意に変化したが、その変化と映像に対する関心、および死別体験とは無関係であった。また、関心の高さと死別体験の有無の間にも因果関係は認められなかった。本研究の対象者は、その大半が死別体験者、または、映像に対して高い関心を示したものであり、死別体験がなく、かつ、映像に対して関心を示さない対象者数を増やして今後検討していく必要がある。また、現在データのない高齢者についても、関心の高さ、死別体験の

有無の情報を盛り込んで、実験を続けていく必要があろう。

引用文献

赤澤正人 2004 デス・エデュケーションの学校現場における展開～実践経験を持つ教師を対象とした半構造化面接の結果から～ 2003年度大阪大学大学院人間科学研究科修士論文

Bandura, A., Ross, D., & Ross, S. A. 1963 Vicarious reinforcement and imitative learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **67**, 601-607

Bell, W. D. 1975 The experimental manipulation of death attitudes: A primary investigation. *Omega*, **35**, 199-205.

Berkowits, L. 1984 Some effects of thoughts on anti-and prosocial influences of media events : A cognitive neoassociation analysis. *Psychological Bulletein*, **95**, 410-417

Berkowits, L., & Alioto, J. 1973 The meaning of an observed event as a determinant of its aggressive consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 950-960

Berman, D. J. 1998-99 Attitude toward aging and death anxiety : Aging and death class. *Omega*, **38** (1) , 59-64.

Bushman, B., & Green, R. 1990 Role of cognitive-emotional mediations and individual differences in the effects of media violence on aggression. *Personality and Social Psychology*, **58**, 156-163

Combs, D. C. 1981 The effect of selected death education curriculum model on death anxiety and death acceptance. *Death Education*, **5**, 75-81.

デーケン, A 1986 死への準備教育第1巻 死を教える メヂカルフレンド社.

Dunand, M., Berkowits, L., & Leyens, J-P. 1984 Audience effects when viewing aggressive movies. *British Journal of Social Psychology*, **23**, 69-76

Durlak, J. A. 1978 Comparison between experiential and didactic methods of death education. *Omega*, **9**, 57-66.

Green, R. G., & Stoner, D. 1973 Context effects in observed violence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 140-150

Hartman, D. 1969 Influence of symbolically modeled instrumental aggression and pain cues on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **11**, 280-288

Hayslip, B, Jr. & Cynthia, P. G. 1993-94 Effects of death education on conscious and unconscious death anxiety. *Omega*, **28**, 101-111.

Hicks, D. J. 1968 Effects of co-observer's sanctions and adult presence on imitative agression. *Child Development*, **39**, 303-309

平山正実 1985 生と死の教育ーとくに生涯教育の中で 樋口和彦・平山正実（編）「生と死の教育ー デス・エデュケーションのすすめ」 創元社, Pp 144-169.

Huston-Stein, A., Fox, A., Greer, D., Watkins, B. A., & Whitaker, J. 1981 The effects of action and violence in television programs on the social behavior and imaginative play of preschool children. *Journal of Genetic Psychology*, **138**, 183-191

Jo, E., & Berkowits, L. 1994 A priming effect analysis of media influence : An update. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.), Media effects : Advances in theory and research.

Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. Pp.43-60
Johansson, N. & Lally, T. 1990 Effectiveness of a death education program in reducing death of nursing students. *Omega,* **22**, 25-33.
柏木哲夫 1996 死にゆく患者の心に聴くー末期医療と人間理解ー，中山書店
柏木哲夫　2001　ターミナルケアとホスピス　大阪大学出版会.
木村正治　1990　大学生を対象にした「死の教育」(Death Education) の実践とその評価.　学校保健研究, 32, 443-450.
Miles, M. S. 1980 The effect of a course on death and grief on nurse's attitudes toward dying patients and death. *Death Education*, 4, 245-260
Oranchak, E., & Smith, T. 1988-89 Death anxiety as a predictor of mood change in response to a death stimulus. *Omega,* 19 (2), 155-161
尾﨑勝彦 2001 死の不安およびその他の情動に及ぼす「死に関する」情報の影響 臨床死生学年報, 6, 29-38
尾﨑勝彦 2003「死に関する情報」を含む映像による情動変化ー映像に対する関心を中心としてー 臨床死生学年報, 8, 65-74
SPSS Inc. 1999 SPSS Base 9.0 J user's guide. SPSS Inc.
Whitty,M.T. 2003　Coping and defending: age differences in maturity of defense　mechanisms and coping strategies. *Aging and Mental Health,* 7 (2) :123-132
Wittmaier, B.C. 1979 Some unexcused attitudinal consequences of a short course on death. *Omega,* 10, 271-275.
横山和仁・荒記俊一 日本版 POMS 手引き 2000, 東京：金子書房
吉田富二雄・湯川進太郎　1996　暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響 (1) ー映像の分類：暴力性と娯楽性の観点からー　日本社会心理学会第 37 回大会論文集, 368-369
湯川進太郎・吉田富二雄　1998a 暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響　心理学研究, 69, 89-96
湯川進太郎・吉田富二雄　1998b 暴力映像と攻撃行動：他者存在の効果　社会心理学研究, 13 (3), 159-169